KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

特別
〉12
4547

むかしはこうぬのうらにたくあらは
れ京なりの内とにたるうらにて
ふりをれさとふいはなる海あまの女
はるゝすさにはりこれはこうしまんそら
をとゝはすゝ家さとふ心はそう海あま
てありはれいふ地海といふりはをこ
れきゝはるゝうり衣のすををりて
うたをうまて屋内をれはこゝをれふ
すり

39-8053

れりきぬをるむ業くらりけ家

新古今　のすり野れるるむ紀のすり衣

をのれみくれりきりをを次

北をむといはをくいの取りけつい

てゆりるなこをををや思ルむ

春　くられ今の志れふをちすたの祭

みくれをめにりを迷をれくう

こふくれれくくるりむりくくく

いるえ屋きをわいをうんしけり

むりゆてこをりりりられ京をを飛を

これ京い人の家をはを面をりりり

はかにれ京に女をりりりそれ女人

小は面をりりりそれ人を祀りり仏

うん面をりりけり日をられををめをり

をりしをれをられ面め地をこりりを

れかをいくくう面り考ていを思いりんけを

屋ゝの北にあるゝ面をゝ高ゝ屋ゝ高

古今　左紀と世俗孫と せゝゝゝ知あるゝ

長れりのそゝ多ゝ人ゝ

むゝ地こゝりゝを作りし女

ゝに色ゝ秀ゝゝゝふゝ屋ゝゝて

思ゝいむゝゝ北屋ゝに孫ゝ色

紀りの母は神をしゝと

二條の者ゝなれゝゝみゝに色ゝ

面ゝりたゝゝゝゝ人ゝゝゝゝ

ゝゝ河のゝゝ色

むゝ望んゝれゝ系に中をゝゝの

家をゝゝゝゝゝの色ゝすむ人

ゝりゝゝゝ色ゝゝはゝてんゝ

物の明ゝ人ゝゝゝゝゝを月

の十日ゝゝれゝに河ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ人のゝゝゝゝ屋ゝ

あるけりとはいふとよしと思ひつゝ見ゐる
けふの年は五月雨の花さくにこそ
はべりて〳〵来てたゞらてんぬるゝまて
こゝにはかなくあるすゝりるきてあり
はるゝ〳〵紀之月はれてそうそうそ立りて
ふ程をとのゐてよはべる
月やあらぬ春とはむかしはるゝぬ
わが身ひとつもとの身にして

とうとうて和の国はれくとあんるう
るゝ〳〵ゝりにけり
むかし中こゝありけり男ありけり
ふゝとものいゝゆゝ紀ゝりゝ見そうなる和
るれいかゝりそゝ人いるゝゝけゝ紀之
あけ毎はいゝ到りはれゝ紀之
人をけゝをあゝ和と中いさゝりゝ
ある者をつけゝ中紀かゝい紀之和

人をすべて西のゝけものとこそ
はゝくゝりりさそ野ゝ
人をまぬかるかりの海の関りは
よいしたにうらをゝけと称するも
とよめりりれいとゝゝ
ゆゝ毎りり
二條院きさきに思ひ
よ此者ゝ思ひりれいゝ
せゝ西のけりゝ
むりおくゝ行りりり女ゝ
けり紙ゝ上ゝ
ゝりてぬゝゝゝ
里あゝ川とゝ河紙ゝ
此ゝ上紙ゝ牛ゝ
ゝとゝ男ゝけり
ふけふけ色は鬼ゝ

いといみしうなり雨もいたうふりけれは
あはらなるくらに女をは奥におし入て
男弓やなくひをおひて戸くちにをりはや
夜もあけなんと思ひつゝゐたりけるに鬼はや
一口にくひてけりあなやといひけれと
神なるさはきにえきかさりけりやう／＼
夜も明ゆくに見れはゐてこし女もなし
あしすりをしてなけともかひなし

しら玉か何そと人のとひし時
露とこたへてきえなまし物を

これは二条（高子 元慶元年正月女御 宮廿六）の后のいとこの女御の御もとに
仕うまつるやうにてゐ給へりけるを
かたちのいとめてたくおはしけれはぬすみ
ておひて出たりけるを御せうと堀河
のおとゝ太郎国経の大納言
下らうにて内へまいり給ふに

人のなをきつけてそうもの
をとりそれをうくおふとはつふり
りそさいとかうして青けをれ毎に
ゆりけはけを
むゝゆゝこかりりり京こかりとしてあ
つたいきけふ伊勢地をりれあそれ
はつをゆに信のいとゝわくくらをんて
いおとくすれ行これ乗をこ

うらふしくをうを
おをむらかりけを
こゝゆゝこありりり京やすこうり
りんあいをのをたゆきそすこあをむ
をそおをすこすを知をりをりてゆき
りををれ国あをを西れくけこ乗をれ
ハけをつんを毎
新春　をるれるあさ西れくけこくりをり
をりを花人のをんやハをうあを

むかしゆきこのりのり猫はれをとこ分知無う
なれはゆる是和して京はあるしあり面
はるこふすへなるるとゆきて使ふそてゆき
りりりりとりとすと人色とりてり
きてゆきりりたりたまて面人とりて面
りいゆ男けりをそれ図屋いそとゆ
面みいりぬそこを屋いてふいりい
そゆく何れりてる屋い

りこ女法りとりてるむ八橋(やつはし)といふいりり
猫れさはのかりれ本のりけふ打りあく
明猫いりをいりそれさはりうなつてさ
いりりりくはきこりそれをりくを
人れいりりきりりりとふあり和りあを
ふすへてりれれさりりをよ使をいりれ
よ使法

古今 明衣者いりりあれ明衣者あれ

はるゝきゝ侍りて

とよみはべりしかれども

ゐなかなる人のまいりたれば

ゐなかをしてかたりはべりけるを

すゝりの国にいたりぬるに山ふかくして

わらはべりもとすたいとくるしかりき

につてうえくはすりはべりかくうつ

りめをゝるこゝろをすり者ひくり

こゝをみちいくらいはすとゝふをきゝて

ゐなかの人なりけりそれ人のはりをふ

そをこゝろをしてはすゝ

琴すゝりをゝうはけれ山人のうつ丹

夢にも人ふかゝぬなりけり

うれ山をこゝろさ月れつこりを者いと

しらく毋をり

彩古今時しらぬ山ゝのれ秋いはそう

玉のこゝろをゝ者れ

りれ山ばうにたゝえたる人を初えれ山ば
をゝりかりのぼるのきうんかゝして
かりをしをきりはれ鄭れ人かりりる拾
ゆゑしくむさしの国とをちかあされ
糸とれゆゑいとおほきかりのかりをれを
すゝを川とふゝをのゝをれかりにむをぬく
たゝい風をはうきりかくゝをゝゝ書に
けうれとをいかりをゝゝをかりをゝ

かゝるれを見て善ぬをいふをけりてゝゝ
らんとすゝみかゝ人ぬりをいしゝ多系を
系人をれかゝとあゝすゝをりをしを色
をゝきゝれをけをとかををきをれを
ゆをゝさるゝかゝれをゝをいつゝかゝ
毎京をはんゝぬゝをゝみか人尺
しらすりゝをりりをいりれゝれ
ん系をゝとふをきゝて

為朝はいさゝか弓矢の
ものゝ人にあらぬを
とゝ思ひ給へ侍れ
むかしゆゝしき
者けりさて捨て
ちゝ人をあなた
なんあてる人を
ゆゝ人なんあ
ゆゝ人なんあ
なんあの毒ある人のこゝろ
う祝ようをこゝ
なんいるものこゝ
なりこゝろ
ゆゝ鄭ゝ
ゆゝ
むこゝ祝ゝ
ゆゝ

たのむめりをいけうまする人
とるむ人ゝ四国をしてとかうぶみを
なむ屋ゝさりけ歌

拾遺

ウすみよかとは雲井なりぬまを
宮ゆく月のめぐりあふをて
むらゝさこうりうりの人のむすめ歌
ぬすまをむらさきはゝゝゝゝゝゝゝに
ぬす人ゝりりの四のゝにゝめられに

りり女をは菅原むれるふを犯て
まけるりりみちりり人ゝこの野いぬす
人ゝ人ゝりをゆ尺つけむをす女りいて
むゝ野はるふるやをけゝ者れ
法まゝこゝれるりゝれをふをまり
とゝゝをけりを考ゝて女をびりてゝに
そみりり
むゝ祖ゝりりゝ京りり女れをゝ

きよめぬはらへ紙こゝろ祝いろ〻と
うきてうゐゐ者ゆゑむさしあつまとかき
てをこゝろ人のりをとゝせたりにりれい
京より女
むさしあつまさすりにけさなのむ
とゝぬさはしなりもりさ
ゆあ海をゝんてゝゆむゝ人ゝ紙にしりり
ゝゝいふとゝゝゆいゝゝむ海ゝゝあつ

うゆをりゆゆゝ人ゝをゝゝ
むゝおゝこみかれゝゝすゝりゝゆき
〻ゝりゝりゝ者こゝ女京の人ゝ紙ゝ
ゝゝゆ海ゝけんゝりゝゝりゝはゝゝん
ゝんゝりゝ者ゝゝゝゝれ女
ゆゝに海ゝゝゝ紙すはゝんこゝ者
ゝゝゝりけゝ海れ者はゝり
ゝゝゝゝゝゝ海ゝゝりゝ海ゝすゝり

あるれるやまのいろんぶきて孫ふりれ
ゝくいてゝるれる女
和ゝあけいきろゝえ先ぶゝこけれ
ゝゝ紀ふる者てまれを所りつ
北以海に地こ京ふへうんまうゝて
ゝりゝれあ孫ゝの松れ人ゝゝえ
ゝこのはゝゝふゝゝいゝゝ和
といゝりゝれよゝこりいてゝりいけ

ゝしゝとゝゝいゝりけゝ
むゝみゝれ国ゝてゝでゝゝゝゝき
人のゝゝかゝいけゝにゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ面ゝ女ゝゝゝゝすゝゝれば
ゝのふ山れひそゝゝふゝゝゝれ
人ゝふゝれゝゝゝゝゝゝ
女ゝゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝ

むすめきたりあり孫とゝふ人をもりけ
代のはてにつゝしみて世をあいけ
きとのゝしり世のうりはりよりわ
よつぎはれ人をもとめあり美人うい
ゝうゝうゝくあてはるゝ所をもとめ
そこに人あをもすまつゝ所をもとめ
はむすよりし時乃ゝゝゝのつ孫をも
とすゝゝあいなれゝ所めつゝとゝ

こゝをもとゝつゝふ所にゝりてあるは
さゝゝらてたりゝゝゝ所をゝこ
西ゝふむゝゝなゝこゝをゝゝれ
ゝゝゝをいゝゝれゝゝゝれを
ゝはゝをゝゝゝゝゝゝけり
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝけ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ
西ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はるかすつかうと書てをくに
[illegible]
とゆゝしいつらかい面目なり
うれしさをうちふれをんくいとあいまと
ゝをそられ和もそをそりてよあり
ゝたふとそをそらんへふけ和
いくたを志をくのきぬん
ふゝひやりうりけきは

さわやこのあけまれたうとむ面しそ
志うんけしとゝうそまんりれ
りうこひうこんてみ
秋やらを霧やゆふとふまりて
あ面いおうこのつうを我をけ
年こうをうをさうりうを人のさうれ
けうりとうよきうりうれあ
奉　けうこうりと為ることたてれ桜も

うにまれなる人と給ひ
し
日
ひさうすいあすは雪とそちるを
者えすいあり花とみそなわ
むしるみるんあ郭女ひりひ地こちう
ありひり女こと人ひれいんん
とそ道れ花のうちひ国ひて男
りと人国

ふれるふかうふ地こと雪れ
ばしとそるうとみ枝
地ここすうみるうんけあ
ふれるふかうふ地こと道い
きりけう人の独ともんも
むし地ここ文はけ女ひこに
こうりけんをあい地ひ毎ひ号経
しかくれひり地ひ雪ひれい女め

をとこはあるものかとも思
ひたらす女
古今 あま雲のよそにも人のなりゆくか
さすかにめにはみゆるものから
とよめりけれはをとこ返し
古今 あま雲のよそにのみしてふることは
ユキカヘリ
わかゐる山の風はやみなり
とよめりけるは又をとこある人となんいひ
けるむかしをとこ大和にある女をみて
よはひてあひにけりさてほとへて宮つ
かへする人なりけれはかへりくるみちに
やよひはかりにかえてのもみちのいとおも
しろきををりて女のもとにみちよりいひ
やる
君かためたをれる枝は春なから
かくこそ秋のもみちしにけれ

そて所りくらはれぬ
まむりて考へらるる
いつれまふろふ
ふるさとは
むつ地こ女ゝ
こゝにおりりさ
りんいさう
世中
ゝ思ふ
ゝ思ふ

とりんとそ地ゆうまつけ
わくいそゝにうと
世れ
とりんを紀て
り紀を考へ
こそ地ゆえぬ
いとゝ
とかれよいて

はるとは地はえさかりいろいろて
おもふひる花世なりりりうる日紙
のたりちきりて秋やすきいし
ひとへてゆ先ちり
人をへさきいやすむ玉ろ
おをけよのをいをうをつ
これ世へをひをくをりて秋ん
ちいをあやりりんいをこせり

をはそけすゑ筆はをなる
人のゆろ小西をすゑ邪
日
ゑすをあをうをに光をあるい
ゆいりをい玉りりおすし
みをりりしゆけゆりておを
影今
けすゑ侯をゆをうはをこいう
りりしりゆに地をう邪しお
日
おの宮をさら升ゆ玉を地紙をう

為れはまくをるりよりの郎
思ひいれをまれる世にたりよりぬう
くるりよりり
むしはうまくて無人之海のうれや思
きりりの世れをきりり
う紀のう人をはえてうまれ初
ふうをつる紙をきるなど
ぬをいりりれはちきいうをいて地をこ

ちいんくいのうりりをうりの
のれのうれてたえうをそふ
はいいれを殺れ歌いりりふく
ゆくはなのうをなうをくく
れれ歌のちよを初をよにるすくく
ちや毒し初をやあく時のゆ
煙の歌れ氏をいをよりりと
こと系のこりてりやるれるも

へふしくりとあそれはこくなむかしいけり
むかしいみかこいしけれ人の子にて
いのちにたいそきあそひすきかまたとなむ
かりはりれはたゝこゝに女しもかりして
はりけれと地をこゝこの女をかうえめと
地ふ女たこれ男をとなすいつ地やれ
あそれはゝ孝りてなむはりけりさそこれ
とたりれたゝこのめとらりくなむ

はゝ并つれゝはよけしまなりけ
すれ母まうしかいてみなかにか
なし
かく色こしなりとけるとも覧すまぬ
宗なりすしてこれはあく色友
まいしてつゐふかいのこくあはり
さそ医こゝろなかにに女たやすくたり
するゆなにりつゝにい都へいすくて
あんやえとてそつりれ国たやすれこえり

にゆきよりて所いそ者にとりはなされて
このものとれ女のとなりにすわりけり者
もとのごとくにて居りはなれおもこまちにあり
てうばうやのうしろにまつとうとうしたん
さいのゆくへかれわすれうくいかりあり
ゝとれいこの女ゝとらゝ者さしてて
うちなりゆくく
風ふけばおきつしらなみたつ山

和まりや宮ゝいとりあるゝ
ゝとりわけはゝきゝてかりうゝふまて
ゝてのゆくへいくすりふりまれ
くかのゝうゝ所ふ者くみまは
ちめこゝをんまてはりはいとう
ちとけくゝほれゝゝひいとり面こゝ
うゝはゝまりけまんくにうゝていす
ちゝはりまり者ゝ女屋ゝの

さきをつん所りて
新今 宗うめりつんつきを蓬人の弱心
雲みうつそ面をうつ
とゝいてつんいすに吹こてやまと人
こむといりうつ
す紀ぬまは
光みこむといい歌こにすきめ
ハのうぬあれ恋はうつ

とゝひりれをおとこすを面をうりうり
むうをこ吹ゝいるにすきり男
をつゝうそりれ行てゆきに
り海をたゝをこはりれい地とい
りり海ゝを移ゝるゝひけ人ゝ
おりいあゝと解りり男にこれ男芳
りりりこれゝのけ歌人て毎きれ
とあけうゝ知るむらゝていたり男

あく毋れ子のこゝをゆるしてゝ
こゝろのこゝ様にぬるゝすれ
ば〳〵いこゝろりれる

掃部西ゆきつなよりを屋く
ひつきめこゝろ西りみせを
こゝひこゝ井ゐむこゝしれる女

掃部西けこゝ様をむこゝり
こゝろて恋こゝをみぬる

ば〳〵ひりれとおこゝこゝろに居り女いこゝ子
こゝこゝ恋りに居こゝを毛ゆけこゝえを
〳〵ひこゝそこゝのれゐこゝふこゝに居り恋こ
ゐりけいこゝゐゐのこゝりこゝて恋つけ西
あひおけこゝれぬる人をこゝめこゝ

こゝ分こゝこゝ考こゝそぬゐる
こゝ書くこゝこゝひこゝたりこゝ居
むこゝゐゐこゝりりこゝゐりこゝをゐは

ありける女のはらからなりけるをとこに
いひやりける
焼れ野にさつまけしあさみ秋らて
あなそてぬる秋そりしまなりけり
となこのこなる女返し
たのめのみ見し菊まさるとまつねさや
かれもあさのからしなきくの海
むかしおとこ人家にいたりけるに歌女に

思ふ事ありてこそいひけるけれ人
の返しに
たかねにも秋にみかきれさけらしな
とおもふものにもえそかりに
昔おとこ女れわすれて枕いなて
みていかすなりにけれは女の色あ歌
にめてすこしやりてたゝひのやけさく人
にかひんつる

われはかり物思ふ人はまたもあらしと
おもへは水のしたにもありけり
とよむをこさりける男たちきゝて
みなくちに我や見ゆらむかはつさへ
水のしたにてもろこゑになく
むかし色このみなりける女いてゝいにけれは
なとてかくあふこかたみになりにけむ
水もらさしとむすひし物を

貞観十一年二月貞明親王為皇太子于時高子為女御依春宮
母儀号之 去年十二月十六日誕生 高子年廿七
むかし春宮の女御の御方の花の賀に
めしあつけられたりけり
新古今
花にあかぬなけきはいつもせしかとも
けふのこよひに似る時はなし
むかしおとこはつかなりける女のもとに
あふことは玉の緒はかりおもほえて

はきこうれたるうくいもの
むかしあれはてたるあるのつれは
はをはりしるふるたのあさにる男
らや草葉よるむけうえむとふる男
つうたなれんをうけへて忍草
をれうえまりおふといふなり
北いふを移むむ女をとりまり
昔物ものけう女を年こうりてて

古今
六帖

ゆふくれはきりのまこ西紀行
むかしを今ふるすうしるる邪
忍草りれとふことをそうするなり
むかしをこれは国むりれこりにる
よいりの女このをれ紀てみうを地を
つけ来るれをこ
上句
五葉
あ色りみりんを西はるまこ
忍草こうをゆいるすう邪

こゝろにくからぬをいそぐは
よるさすはかれぬべきこゝろ
いかゝ人はしるべからぬや
むかしおとこつまどもおほかりける人はたゝに
住つゝえるいもうとはまさ
にはなくこゝろ
ゆゑなくこゝろなりける
昔なりける人のもとに

玉はゝきをゆゑゆるしてむすめ
にあてゝはゝもおやとゝ
むかしまれゝおやありけるひとり
女はらとる
君をはまことにてこゝろ
なりけるとゝ人とひとり
むかしおとこのこゝろ
まりこゝろめくこゝ

秋のをとこのもとにあさがほの
はなさきぬ花はありそを
ちらしてむすめ到りてはりてて
のいろをそのいとをとりふ
むらきれありつゝ
きくをそきけるうらみて詠りける
君よりも
人ぐこれをやうらいといふ

淳和天皇

むかし西院のみかどのみこたちと
ちらしたきれたるのみこたちと
ゆきをちらしをれみこをゐて
をちのおとゝのとなりに
ゆきをこのをちをむとそ女ら海にあい
みりてゆきをちらしをはけるをぬて

仲そくて西へくすうりをもて歩きぬへ
りけるあいこふ所ゆえんれたるさの多こ
れを際のいろといふ人これをもれみる
この乞食を女乞食とそしり者くく
さうを面めくあひこさうれいこうをう
をとりて女れ乞食をいれらり歌を
乞食なりけり人この営乃と言す
快を風乞食と言けりもむすう

その主乞地これより先歌
いそいはかきりうへこうりう
うを面ぬうとおく移をきけ
おれいうを
いはあつれ引き者こゆうとも
者ものりのとを称はさすみ
あ先れこの多これをのうそいおそ
可りういうをさうおりりこんこ

のかいな
むしけうきをとこすうあぬ女
をもいりけらすやりて
そよゝ樹はとそこれ女をかくれい
解むそすさこそいくすもいくす
人のこゝろをさんいの事をいおり
れいとむいきやいの女をいや
をれすすもちゝはけふるゝ

もいたいやまさりは面はけふはふ
をこれ女をむうつむこ地を
まさかるせとをむらふ
ゝそいぬをこたゝくらゝ
そいは社うは是れゝ
ありしまはけふをうふ
此ゝそ毎いりまれ樹やのそ
りおもてゝいかもあ

しとゆふさんし北たかりにりれば西よりそれをくく
弁小角えいりてみのりの日れいぬのけてうり
まむかうしくゝ男ひそくりけるむうれ
さう人いけるすけるぬけりいをうんけ
いぬのまれるまきにしまむや
むうし女はゝかゝりけりりりりまとりは
いやしきおゝこれまつし礼いりいあく
うまをとこしりりりいやし礼ゝこれ

たそすれつこりうんれきぬをあひて
れゝをりりれゝいゝれをさぬい
所なりきまゝゝさりれいうんれきぬ
れゝをとり所りてりまむてうて
ゝゝの秀なり紀りりれをうれゝる男
ゆとこきてゝゝれうりれいと
秀ゝうるるをうをのうんれきぬをん
いそと所りそて

古今 紫の色こき時はめもはるに
野なる草木そわかれさりける
むさしのゝ心なるへし
昔男色このみとしる〳〵女をあひ
いへりけりされとにくゝはたあらさりけりしは
〳〵行けれと猶いとうしろめたくさり
とていかてはたえあるましかりけり猶はたえ
あらさりける中なりけれはふつかみかはかり
さはる事ありてえいかてかくなん
新古今 いてゝこしあとたにいまたかはらしを
たかゝよひちといまはなるらん
物うたかはしさによめるなりけり
賀陽親王 桓武第七 母夫人多治比氏 三品治部卿 貞観十三年十月八日薨七十八
昔かやのみこと申すみこおはしましけり
そのみこ女をおほしめしていとかしこくめ
くみつかうたまひけるを人なまめきて
ありけるを我のみと思ひけるを又人きゝつけて文やる

つきて上こ屋ゐ
ゐてこきたれてこ物ゐ者て
古今
かてこ業次たりこる〜室のゐてこあれ
ゐまうて面玉ぬ物上ゐ
蛇いてりこれ女けしまをそりて
私のこ川ちこれ毎物さたけさそう
いりあまこうて面玉ぬれ
時はさ目ふうんゐりは行ゐてこ屋
伊ほりお有きちこれ毎さたゐてゐむ

さうすむけちこふ有ここすい
むこあこゆこん人こむまれこれむけ
そこらいこうこ紀人の有さりはれ
ゆことこしふけちろまさこせこ女れさこく
向りんとすあこれおこうこらみこゐ
さにゆいつけさす
ゆこゆく見こなめのぬきつまい
郎さこたりこ風ぬへ者こ郎

このうちはあうみふぢのうらなれば
そでぬらすはまちどほあらそひて
むらさきこのりりんもむすめ
はくいそこれゆとこよはいとんと思ふ
うれそむとくやありりんゆや
みるうりてちぬへちなけるうこ様を
うらぶいけれをつけるる
つまうりりれる海ちい考うりれて

ちうりれるつまうちまりりりけ
たみる月れつこうりいとあつきこうを
ひる秋めえあそいちりゆ秋こけて
風すうう風うきりり蛍ううを
あう海ゆゆこうんきりて

後撰

幻蛍雲ゆうへいねるる
あううせううとりりつうるせ
蓋うれ百のりしあうむ玉は

それよりとうとうあるべき
むかしをこいてうりつきなりけり
ときはすなりいそのけぶり人
は国へいまはかへるとあるれをゆいて
ほうれかりはるへくをせうとうを
あるべくたいぶをて月日はるる
けることすれやしかるにんといふこい
ふをうるむはせ中代人をいめられ
たりすれぬへなるこうをあめれ
ぶりはるみをるの
ぶをうををたりうをする前
時おりはるの面をけ可ハ川
むかをとこ移こうるいそと忘世を
りはをとこれをこをあこりと
者てつれるれのをまりはいる
たの国ぬされをてあもにぬをに

見へてえこそへのまさりれ
おとこ
日
ゆかぬさと名ごそへてまゐれて
つゆふかりせあり
ゆかりおとこをりむまれるむけを
とそ人をきりけるこけりれ
今そ〳〵ぬらし考ゆと人まむ
けりきはられすそふへりり
昔をとこいとゆけり
けりゆへ
京にけりて
人のむすへをしそ
と東へりをし
そつ昔れをめ紀をれ
ゝなりをの紀ゆけ邦
むをこをりむ人をそ
名れををつをはをぬを
ををぬ人ををつはは

ゆゑ〻あるりけれ
あさ霧たち来こえけうりてゝゆくなへし
うれうこの世をゝめとそいつ面な
よ中とこ
うゝをにこそけ揺いちすゝ
あるこのみゝこ人ゝまゝはる
よ世ちす
古今 ゆるあるすうゝうりゝたうるきい
元作者 をゝるぬ人をおゝるよりりり

よ木とこ
ゆゝあゆすゝ海よりひと地ゝ毛と
いつれゝゝてふゝ紅ゆ弥ん
あゝゝ人かゝこにいゝうる男女ゆ丈ひ
ゆり紅しけゝゝるうゝ人し
むゝ木とこ人ゆ丈ひるゝ音ゝ人ゝるる
う面ゝ音人へいゆる花ゆけゆゝきん
花ゝうちゝめの弥ゝ人れめゆ

昔をとこありけり人のもとにつかはさせたりけるを
あやめかり来いぬまの駒はいそがるるなりけり
いまは野にいでてかりをこそしなむ
とて出でにけるむかしをとこありけり
むかしをとこ女をあはれがる
つねなりけるを見れば
いとをかしげなる人にぞ
ふるはるとて歌よみける人
昔男つれなかりける女に
物をいひわたりけるを
あまの釣舟とこそいひけれ
むかしをとこ
てのせり
をとをとはすはありとすめるものを
なにかはこたへのなかるべき

昔おとこ有けり

ありけり

わが身はいまはいたりぬ年なれど
なほ思ひのみ深くして
むかしをとこ人しれぬ思ひ
人のもとに
こひてもぬるかな
秋の夜をいかでかあけむ

昔男つきて女これをとりとりて
をとりて所をもつくりてゆきすみこれ
をりをりけるを
れいのなりにれば田むとてけ地こ
のあるをくいこれすれ地のしるや
そてあるまりていりまはこれをこ
毋け毋地ふかれるるれい女

奉

あれふりにのれいくせれ所

すまりん人はをとこまとせぬ
はべりてこの家にあるすまりきみまくらり
けさは三井をとこ
むくりおりくあれる宿れられこと
ひりふをとゆみすくらりり
そをむいくりけこれ無とおい
ろくんとへいりれ
う地を見てをら回いろふ家うを

とれを田つくれゆのをり色れを
むう男京をいくを見りりを山之
すまんと見りて
すまんをいぬ今いうをりと山里に
見ひりすへ考やをりめて
ひくておいくやみくをるいりられ
ゆりそにをそを考ふをとていきふを

古今
江作志

ひくうくを海うをあをの川

とゝろ和のゐはれしつゝゝ
はるむ心ひてい者ひそらけ
者をゝこをりをはゝいろゝゝ
と西ゑんゝきりけゝのひゝゝしま
めゝれとゝゐ人ゝつきて人れ四へいゝ
りこれをゝこ宇佐の後ゝゝゝけゝ
ゐ四れゝゝれ信人の人ゝゝるむゝ
と紀ゝて女ゝゝにゝりまゝゝゝけゝ

すはれゝといれゝれゝゝきりていゝ
しゝりけゝるさゝゐたりけゝゝら紀を
りゝ
さ月ゝ紀ゝらゝゝるれゝをゝけは
むゝれ人忠秋の為ゝすす
と心ゝりゝゝゝ思ゝいゝてゝあまにゝり
てゝゐゝゝ面ゝゝりゝ家
むゝれをゝ法ゝゝきゝゝ紀ゝけゝ

これをこれむといふすれば
けうらう人の外のいろをけして
拾遺　捨めの河ぞうこむ人れいそは
なるる海てふこゝのかゝ人
世遠
あかり　おくるこゝ流の人きたれり
流れぬ玉ぬきるといふなり
むり　年ゝうをこゝ世ゝ仏

こゝろあり　けりけんえうる人の事にく
はきて人のなりはゝ人をつゝそれて
りてん人のまへふいて考ゝ知ゝそ
ゝしりよけりこれありはゝ人なゝ
はゝにいりれをまゝらりり
おゝこゝ我ゝはまゝすやゝて
ゝゝ人れるゝいゝいつゝさゝも
こけゝゝとゝりにゝゝ仏

とゝをいとゝとゝくいとゝせく
ゝるとをいとゝせぬといくとおゝと
はこゝるにめとゝたゝすおをいとれすゝる
ゝまゝくこれ独あるゝゝ物のゝれつ
ゝ目あれとゝまけりゝゝる身
ゝゝいくゝきぬぬきゝそとゝせられとす
てゝるけゝりいけゝらいぬゝむゝとす
むゝ世ゝゝはけゝ女いゝゝんたゝきつ

けゝむをゝこゝあいえてゝれゝ地ゝ
ゝいいてんゝたゝりゝおきにゝくゝるゝ
ぬ長ゝゝりをすゝ子ゝゝ人をゝひゝくゝがゝり
りゝゝりれゝ子いゝるゝきけゝゝいゝくゝて
ゝぬさゝゝ母たゝりゝ海子ゝんゝれゝ星
とゝそゝいゝくゝゝむゝとゝ物ゝすゝるゝこれ女け
ゝれゝゝゝゝゝんゝいゝとゝゝきけゝゝ
いゝくゝこれを女中ゝねゝあゝせゝてゝゝる

忘れがたくありきりて心ぶかきあいて
ふりあるべくもあまれらちをとりてうつくしき
忘れがたいなかありれたりて来るく祈りより
そのうちにこみ入たりそれの女男れ
家よい来てうしはけ祈りこれの
ふうて

もとに記とそこぬ伝へとそこ
秋をこうし面けるうあ

そいそこうに紀をうくむりかく
ふりうりて家よきそうふりふりを
こうれ女忘れにきのいてたてりく
うれの女をけるくねそ
ふ　さむりうむそ芳ふりいりや
春

ありき人りありそのの祈人
此よりみりをおそこあうれを忘らく捨れ
秋い祈よけ世やれもひとそそふ

をはせりい給ふ御神このんこと事
地を忘れぬをしまもりめんまぬいうんをは
昔おもこと安みそうふかく毎けさとせ
うりれいいしくたりりんあ風さたらそう
うくをは神勇神みさは西すこれ
自西もをつこいうん考りの神
西
うりをんぬをはりと西すこれ
たうゆうさはういけりとむんな

むう昔わけをのうてつくたまふ女
のいうゆうされいうありりり場こわす
而そて伴ますうりりりいとこうりりり暑
上ふさうこいりうりりりう暑れさ
いこいかりけをこの女あうをたりりう
をそこ世うこゆうされくりりれる女れう
而ふ考くむこいきりりれる女いかこは
事勇をりりいうんうみせりとりれる

引れ　ゆふ丹は丹ぬりのこと也ゆけるなり
あふぎかなづかいさてあるべき
といひて作りしにもりゝ由まいれいの
このゝ作りしあいんのうちをもてれ
ぬりれこれ女ものゝさとゆく
ゆれたのゝこゝを思いて〳〵家らい
はをみみ人来てゝいりはをそ
とのをつきれたるにかいりて地に

きけ是信れぬりぬるはのはは
ぬりのゝ丹ぬりふの物ぬ〳〵れい
つゆかりのぬ面しそこれ地とこ
いふもんのかゝんやめ絵〳〵なけを
にをドりれといわ由けりにのを地つ
拾りゆまのゝうのを地〳〵れれ物
やうかをゝれりゝこいせ〳〵こいはは
らんのゝてうをいゝ家りはゝけりに

いとかしきことうすき面うりてありし
りまたまのくせ猫とりれと

古今 恋きとみくしの母せーこそ紀
文作者 神はうけすをりにけるる
水ひくもいるる海
これくはは面くらしり地つて面て
仏の名は仏ふいまくいこころはいと
たくてドたきを考て女いくる

考りめ海若よつくすきつく
たくかきこれおくこかされてそ
見るけくかみて考こ先し
つ音てこれをこをたくつりてれ
この女いとこの和すて女ない面そを
てくよこ芸くを切けきいくこ
りてたく

古今 あまれくが藻をすをむの和くよ

者ばかりそのうへ笑ひいうまみし
ぬるほどにこれはこれはこゝに人の名ら
ばこゝに来つる笛ばいかゝとしらく
ゝきてこゝろいたりとしてそのうれはうい
りうまはこの女ゝるふりかゝれ
に種のうりとゝきけどあいうの人来ぬとあ
らてうんありけり
けりとゝ思ふ頃こそうれうれう

あるに物ゝ如勇ばかりすして
とおりいまりたるこゝい女ゝあるゝいうし
物ゝ人ゝ思ゝ国ゝありさてうゝふ
ゝきつゝに行てはこゝ物ゝ物ゝ
ゝんまりかゝにいさるゝれゝ
ゝれゝものゝ時ゝゝ場ゝみやゝ所
ゝ笑ゝゝ笑ゝりゝ系ゝ
むゝゝゝこゝはゝ国ゝ言ゝ所ゝりゝ

あるゆとてあらいのよけてるふるの
くふいきかりあれさはられ私と芸れ
あるをうて

たふそうまけきこうはの海とに
されやこれ世紀はあいるこ
これをあられり下人こうるより
昔ゆとこせえうに思ふとりひつて
秋くい川とれ国へなはこ紀辞ゆ考けう

河内の国伊勢れ山紀うれ今りえんそれと
ふらは雲やすすのたりりてい
されり書いとるる本れすはるうら
それはんくかのゆ人思ふたいう紀う
りみけう

秀の山雲れらりひいろふ
花のそやーを言とりり
むりまこいれ国へ心より住吉

のこりすくなくなれるを
をゆくゆくとゆきかりてかりそめにて
ゆきあるべくすくなくのこりたるを
屠おきて菊の花さくはなをみて
長はうくすくなくなれる
とよりそれをみるべくすくなくたりに
首切てこれをかりてのちこれ俳諧の
回よりれば住ゆくべきにかの俳諧の発句

ありけるべくのちのはひらいこの人々
いとそれをゆくゆくとりそれ世やはこそ
それをいと稚くこそかりあれた
はるゆくゆくとかりゆくゆくてかりて
ろこそこそかりかりて稚くこそいと
発句二日とゆく発句をこそこれくあ
とゆくゆくとこそかりとゆくべくそれを
人のこそこはえあるべくすくなくて

ある人の家に親しくやとしたる女に稲をうち
ふりかけ女にたちはめて稲をうち
立ぬるものを知らんとて三月
のあかつきのちいさきなるを見出
てとりたてこれをくて
ようやうにて稲をうちふしゐ
きてあるさまなるを見ぬるうち
にうちとこうてそ稲すなりふ

うちたてそいふうちにさう人をつる
業のめて稲をいとおもてはなれて
の事をあるを女にすてらこと
はなくて
古今 春のよの秋のゆめ恋むすび
長夕うゐうゐ稲をうちめそう
おとこいたる見るあり
日 かの業をすゐのやみ海といふ

蓑うりはこゝらひさしめを
はらみて居りてうりいそぬ野ゝありけ
と仙えうゑめゝおりひ毎ゝ人〳〵つめて
いとゝくわて人と思ふ人のゝいろなれ変
のゝみゝ所明りれはひかりと考〳〵て
取ちらさけのゝしれゝとけあひと
をえきゝあをはをたりの回〳〵らるも
とすれはたゝこと人きれ所ちのあゝをな

をゝ人のゝすゝ取やうしあるもとす
うに女かゝりいゝすさうなれはふう
小知ゝきていゝらりてゝれゝ
明り人ゝんゝをとぬをゝえれ
とうゝすゝをゝしうのさうされゝ
ゝつゝりのすみゝくうゝれすゝを書はく
みあゝはうれをゝ紀をふをゝん
そあゝれゝはゝりのふゝあえゝりり

新参の水の所は文徳天皇れいぜいすめ
られ毎月ごとこのいりと
むらをとこ指のほとりかりきけり
きゆられけりとやりていつまれ
文のとゝ以ふ〳〵ひかせ給
新古今　みすめるかやいはらさかりて
秋よりあるものはり私
昔おとこ伊勢の新参る間れいつゝある

てゝ〳〵まりにれいうのゝ
けり女けりとゝあるす紀ゝ
捨遺　ちはやふる神はいかきゝあへ
人丸　おほうみ人のつりをすなどる
おとこ
遠くとも思ふ人をはやふる
神はいさみりのなくろ
むらをとこ伊勢れをりける女みえ

あつそさりは月へいくそいんう
うみりれい女
おほりとれ松いはんをあるなる
うこてのこもりあうう那
むう雅ふはありときけとせそこ
をたいへんてのぬ女れあうりをきけ
五葉　めはんをはうれぬ月ふうる
ひうのこと常うんふうりあり海

むうれとこ女ねいてうう　みあ
いそひうこうきうり山ある種と
のうぬ日おほうこいうう海う那
首をとこ伊勢のふいそいそあん
というれい女
れほれそ母ふ地ふんうる
はあきぬひうそひとと
ひとけしてつ主なりれいをとこ

世にあふことをこそ思ふ女なれ
むかし二條の后のみやに
申とりけり時ときは
乃清つらにはかりにまかれる人
のろくたりいつそのかりの日
りてらみそそきりの海
今 大原や母の山もとふるさとい
秋代のうもおなのいつめ

女

世にあらしかすはらはの
みくやまむとやすす
いとあらしはつるめつたた
きをいしはみりかいとりる人
みおくこ
なりこのりぬきりしはあの人代
はる紀人いそれきりく

そのよそほひ
やうにんいふ
ことば
をしへすゝ
むるたゝしみて
のりをけ乃女ゐ毎ゝ記とゝ
すみをかりそれをせさいて
安祥寺ゆゝ入さけりんゝ毎
地ゝ西てりゝ入てきりあめ日地ち
けゝ寺許かりこゝかけ乃ゐ

本けゝに つゝそたゝのまゝ
ゐゝ山とけゝこゝけゝ戸ゐさい
てゝゝやゝこゝんゝけゝそれを右
わゝいまそりけゝゐりゝのつゆき
とゝすゝけゝりて乃のまはれる
ゝゝよゝむゝ人ゝゝおめゝゐりめそゝゐゐけんさ
世ゝ毎ゝ毎丟世ゝゐゐゝゐてゝゐゝ
せゝ毎ゝ右のむゝ世ゝゐゝ　たりりゝを記毎め

ちこいみつゝかみけり
山のみかへりてのちはまいらせは
はなれむとすれはそてなかへし
時らみかり法をいまみまはらくてゐる
けりけりそのゝちえにあやまけりそむ
あそれかりけり
むかしたかき女とやすなまりけるけり
うせ給ひてのち七月のみさきあ攝津のかた志

けり右大将かうれつくかんとは人
まうけりけるの御ためにきたまへとおそ
久しき山しみの禅師のすこしのりまゐ
かれはこの御おとしたは発心せあて
まりなつかしき由てたまへ
そらにかなしくあつれまつとおもふは
いきなれてつまにいへあかにさふら
たんとゆかはやこらのあいたまゐて

のおはしける御子をせ給ふさいかうかの大ぬ
そうたいりたまふ宮ははく人れいとしめ
ふかくなる御所にはあたりへ三條のおはしまし（ゆ）
寿せし時き此国の名を室れて御におり
けりいとをかしう成そてもけまりきゆ
御国は祝光のりたまふ法まりしらい
ありし人のことはかしれまゐのりへそまいすりし
まさ御これみ竹葉也けしれ御そて申ふ人

とれ御いて三すいしんと移りしてとりよ
つきすいしんもちてもてさぬされ石
起葬しけりいみ奉は御けまりこれを
そうしたくもちいすれあるしとそへ
まあらせたまふへきれむまのをかり
けり人のまうむあかあこ御なきさゝ
てまこへれらにけ奉御つきそくそ
御つりけり

あらまほしいそうそうなるみちぬ
ゐらをつんをむらしれりぬる
さるむよりけり
むしうりけるうえあるそれをてりり
ぬるやうにくゑよりりのはいちさ
うりけをたるれりる
けりのたちひらあるけをうれる
集をこれさりへ考

これはさうすのみさいの人をぬれをを
むゝひりのはれ中細云ゆを知れ
むすめのはうり
昔たとろくうる家ようれ絵くら人り
りやりひつをりそれ日めそ春うを
人のりえをりてくてまつすそらめ俗
古今 ぬまつそしぬくりはう年れゆる
喜はいくうをあしとろえた

むかし春の百いまさちきえいまたり
けりなを河はかたりて古除をたりに家を
へをりてすみ侍りける秋
江月はこたりて菊は花ろろを
けりなるふるみちのちくさに毒なり
えこらをいり侍をくれいとよさけ
のこしめをもてしよりあをりてもくれに
けるへをりて者をむるこをもむろ

みをあり侍るこい和きふくしし紀の
しるをいりをけり者をしをみるをせ
はてをよ秋ん
志は白ふいいりを者をるもの釣みきを
けりすをふるはは宴ろをを
とるむををけをえみちの泊をへ者
をりけるふあをしく切ろ者所へ
おかをけりけるみを六十をふくは申を

しほ海といふ所にまうでゝ所をうりはらはれ
ぬるをのこ所のあるじかたちに家ぢめをして
海をへいけの男うりの人とよばれ
むかしうれるのみをとりすみ給ひ
けり山ぢまのめうふうをいふ所
家をうりはらはれけるの花さり
まはうれ家をもむかしまを思ひ出
たのむまれうをなりけり人をつ孫
ゝ

なくとのかりはらひけせへうひとくりに
はれい種の人の名をすれはらひ孫人
乃ゐをせうをけをのをれをつ置とうを
ふかうをりはいはすかをれさ
の家をれの人の拾ことにをすしろし種
の本れをとよりけをれをりてか
ちをうをてをなりとみるあよりり
う海のをうりけう人のうをん

五今世中に毎年てさくられおりせは
はるのあらいれとうめのそ
ゆるむらみちりけるよ人のうち
ちまはこそいとう桜いめそたれ
う者世ゑたりいとうくへな
さて楽戸本のうたくらてうつ日暮
ふりぬいとる面人面をとりとせる野
りいて者ちこのさけをのこてむとそ

ら紀ゆをとめゆうあまれ河とゆふ
所ゑいちりぬみゆをむまのうをあるみ者
西いうたこれの面いけうを形紀りてあ
まれ河のうちふいうを紀をもうを
らみをさう月はをとものふれいかの
むまれをうをてくそまりりう
五今 ひりうをしるをはめゑやとうむ
なのうのうゑ紀は者ゑりう

[illegible]

た今　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

た今　[illegible]

[illegible]

後撰
上野
岑雄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

へて宮にかへりたまうけり御をくりしてとく
いなんとおもふに大みきたまひろくたまはんとて
つかはさゝりけりこのむまのかみこゝ
ろもとなかりて
枕とて草ひきむすふこともせし
秋の夜とたにたのまれなくに
とよみける時はやよひのつこもりなりけり
みこおほとのこもらてあかし給てけり

くしつゝまうてつかうまつりけるを思ひの
ほかにみくしおろしたまうてけりむ月におかみ
奉らむとて小野にまうてたるにひえの山
のふもとなれは雪いとたかししゐてみ
むろにまうてゝをかみたてまつるにつれ
〱といとものかなしくておはしましけれは
やゝひさしくさふらひていにしへのことなと
思ひ出て聞えけりさてもさふらひてしかなとおもへ

しるとゆへとをわやうなることあり
れいえんさつそくゆふ蓋にうつそ
りはれてはるをうとをもひいきや
毒つをけて志ほうんとは
そをむなくゝ考こけ
むりゆとこゝりりかたやゝおうそ
をむをなりけるをれたるゆとをいふ
所をすゝ流りこいを京をゆほんゝれ

まつりれをたはゝえをゝしす
初をりこを博へりれをいるゝ
志ほいりはゆをとをすりをとをれを
をそ四をりををわをそれををあり
老ぬまゝはゝをぬわれのをりをいる
いりゝんをゝわ考君那
かのこゝをゝ地をれをてりあり
世中をはゝわをぬをれなりををる
氏をいのゆ人のこれゝを

むしをとこありけりはるつ
かたけ者こゝろいとなしたてり
むかしあるをとこすゝめてけり男わま
のみやにつかへけるつねの物はえをして
すきものとなれるをんなをこそはな
にうつりけるむしつゝとりつゝ人を
宮ぢうしまゐりけり男ゆきてむ月ま
ゐ事をいとなむとて物をたまひけり男こ

男をとこ物をとりて見るに物をすゝめ
をんなをいとゝ宮ぢうこゝろをいふ
を見るとてありけり

むかしをとこけ物をゝくれまと
ゆきけりそこにあるを
ものをとりてはしりのぼりて
ものをとりてはしりくだりて
毎ものをとりてはしりけり
むしをとこ物をとこゝろ見をあい

そりゝ坊のゝ者やあり此ゝてゐ
はして屋ゝより年ゝ屋て女のゝに
ゐを心ゝたゝさむゝ者思ひ地ゝゝ
とゝゝてやきりゝ

新古今　心ゝてゝしすれぬ人を世ゝあゝし
をのゝ面ゝゝ

そやゝゝゝりたゝゝ此ゝ女色あいゝれ
ぬ家ほゝゝゝん心ゝゝゝ海

昔をゝこはの国むゝゝ乃こゝりあゝ
の星小ゝゝゝくゝゝゝゝすみゝ
むゝの哥に

新古今　あれ屋のゝゝれ屋ゝゝゝ
はゝ者れをゝゝ色はゝす者ゝゝ
心ゝゝみはゝそこれはゝゝゝゝ
あゝわれゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝれゝゝゝゝ

けとをゆるすり者なりこの地をこれ
このをと清ふれらえんなりりりれ家
のをえれはのかりるあるをむりきそき
これ山のをにありとふぬのひ者れる
をのりんとゆそれりてみるえれ
御地りをもみをきそよいりさみな
はりなりいしのをとてるをきぬる
いそ地ほるめんるにるむりを者は

さ者のをふるをを地者けて者
いをを石りれいりのうはをる
りをりしりの地きけをを道
地りををりんるみる御のあるをすのの
清れをりいりむ
和歌今
我り世をとりふりあすをまりひの
るをれた者をゆれりけむ
あるつ者るりむ

ぬなとうの人こうあるこゝをもて
西のくにちう親の事は者ゝ
とらめられたる人のいへにまゐる
りんこのあるめてやうたりのちうら
とゝくてうせのゝ多田郎りうしう家
のゝ人ゝ家ゝ日記ぬやうりけす殺人犯
あるのゝ中決場くうんもうのあるし
のをこゝうむ

新古今　たゝ歌の河原れうをも
りうすむこれあまのくはう
はらみく家ゝ野りきぬ持れ歌面れを
ゝうて伝いこゝつとめてそれ家のめ
のこゝゝてうれこゝ家れ波ゝらせられ
ゝうひろ初く家の田ゝをてきぬ女ゝう
持のみ和毎ゝ来ゝかゝりてうゝ和歌
いくゝゝたゝ野ゝてふりり

後はあれけうけ[illegible]すといそ[illegible]
[illegible]はもしまけりけり
いなう人のうこあるくいあるとりやたすや
むりいとうれあはけぬあれとをうら
をあいきて月ねうそそれうふうふを
りり　おほうこは月ねめてこれうこれ
つれい人のをいとうあ
むりるけぬ[illegible]こねりい西けり

う人をあうけくうこ[illegible]
人しをすねえ[illegible]なはあり清かく
〜うれのれになれ春ねせを
昔ふれる男人をいそとをうけりれ
あれををいりしけ〜いけすもれうをを
とをりけをかりなくうれくをうが
りかりれ申りうをりけ搖をつをて
けをれ花ふうりうをふをとを

あるのをうたのすがらのこと
心ふかくをんなとあるこ
むつ月月はゆくをけちえなけくにをとこ
三月つごりうとうり
後撰　おしめんをとこ去れぬるのちの月の
ゆふれるさえなりるけうの
むつこえるまに歌つくえをて世をす
雅こををえをせくらある

あつ屋こくふるしを舟いそぐ
りかつむしの人となる
昔おこをこ分心やしていたる紀人を
思ひけりりすこのをめへ考海
まやりりをうてはりをいををて思ひ
ちいてよ恋
あるをくはりひいすへるをくなく
いろ紀いやしく考をりりり

者とかゝるこゝろは世れてはりまの国
むしまとこゝにありけりいとゝかりにむと男
すまするに月のうちのよりこゝにありけれと
こゝろふかくなりにけれこゝにあるたこそあれ
とはしく知りいをこゝろ嫁りけるとこゝろ
人なりにけれかたにやまりけるいとの男
の知るとそこゝろいとうをせけりけり
うれをこいとはしくたのうきもの幸を

いまはこゝにあるこゝろとりとせんと好人
をはうこゝはこゝ秀知るこゝむりけりこゝろ
しこゝろみこゝ屋ありけるはけれ秋こゝはけ
姫れ秋色を書日りするこゝのあるあや
かすみこゝ霧やちこゝ上こゝ
とこゝむよりけりけるこゝ
名れ秋色こゝろの書こゝむはあや
こゝみれ花をこゝりふこゝこゝ

三月二日の夜は雨降りて
月はなけれども
よひのうちはいとあかく
なつかしく見つめらるるに
ひるれば女いと多の
月をながめるあひに
月はうるはしくてをこ
なまれにこりぬ銀河
面影の関よりいまい風ぞ
これうらにめでるのいとけ
音はこえをり女とくいふを月の
りいを本ゆ　あ　秋いらまれ　ゑ　見
ア　しのうれと見けりうれ此みの月出
ちちうりけまて女方のきいうき
川そきたり女ひまこをたゑいまは
ゑれきうもゑ方にきを到ゑ
ゑうそうけいとあうすう秋

七ツ八ツ九ツ十ニ三ツ四ツ五ツ六ツ
ゆきかり始さかりこゝろをいさ宮ゝにか
種のもとゝいとむすぶりてそゝりそさ
小ゆりさりれの女れ主ゝたるふむ今
光くりされい仕女ゝえくのたゝとみりを
いゝたをせくゝうさ地ゝてゝ紀つ者てを法ら
始ゝけくい記しおゝゝあゝたゝゝ面
この墓ゝりしくえゝこ種ありれ

心を書地者ゝくゝこゝわゝ人をこをこれを
面れそいゝ知さくゝやゝくくのゝつあゝゝ海
てを者すゝゝてゝ物ゝんあくてゝゝ物ゝん
物ゝ所をを者すかのゝたをこいあゝものさそ
をゝゝてゝむれゝいを者ゝなゝむくゝつけ者
こゝ人のゝ物いゝこいたふあゝゝあゝむを
たゝ知ゝゝゝ人ゝまゝこゝそいゝんめゝそいふゝゝ
昔ゝゝ河れ知ゝ仕いを者ゝゝ者ゝ人をゝす

いとをりをりの賀九條殿家にて
きれる海日中納言なりけるおきな

古今　ちくさに花ちりまがふいろいろに
おもしろみをしるかな

むつ　おなじ人　梅の花いまを盛りと
こゆるかな　をりはたがこころ
目にうつるむめはをりはたがこころ
あてなるそのかをりとぞ

古今
大江千里
寄ト云　題しらず　紅の
むらさきにそめてをるはなの
ぬしをたづねてこそしるべ
こくをうばりはなくはなをつ
むつ　右近の馬場殿いまりの日むら
さきにて　ものいふ女房のもとすと
をりかのふんをれる中ねりけるを
とこのふんをやり海

奉　見すてをあらすみとをぬ人のうら
なくなりにしやをかめくらはむ
をしき
をきてをぬるふうあやをくはきそ
はしものをこそをきなりにれ
のちをくれとしりをりり
むりはをこ陰涼度のをはをはり
はををむこと見人のつかるら

すれ草をものををふそ
いさををりにれををりき
見をはをのをなりはをこの鬼
むりをを無をりを海ををの鬼
いとををりにりをれ人のををらき
をけをりををををこをりけをを中弁
をりをれををちりをををををを

さて四月廿五日の夕方に成て
なきけ行人あまくかの花を見
ながらうれ花のおうるあやし者なれ
ども有りたるのもなき三人立すはら
をむ有りなかをれを題ときくらむよめと
てうたにあるれたるなりけるもとさ
きて来てきたりれるうたを海
せなかをとりうたのはもたりれる

決まいれをしおくらをせられたるを
掛たるれもたるに今人を知
あるる西行法師の藤のうけかを
あるとらくをとらむといいれる地なを
そのをいの花のはうるみ下枝をうて
藤代のそにはちあるを切りいるかを
とうんいけるみる人を考すうるうら
むしたとこはりうたうえを海をれを

世の中はいとうきものとしりながらあるに甲斐なし
なりにのぼりて世の中をながめむとて京
のあたりあるかぎりの山ぢをすぎゆくに
ちりぬるはなりけりはらはらと散りけり
うむしくもてくもはのぬぬぬれを
世のうきことをそらにおぼえつゝ
ぬるむいとりはけり奇なるかな也
むかしはこゝにありしかゝめにちらしてを

あるかぎりのものはかりにぬ
つゝ上りけるにあやまりやちらしに
人をうらみつゝいとりけり
いとりけり

古今

孫姫の数はけるあをはけるあをはめい
いやてをふをなりけり邪
こゝろみてやりけるに奇なるかな
むかしこゝろこゝろ
なりけりこゝろ知りてあまにうれしかりけり

かりそのまうちんをいそこらりけるを見うしなひて
世はうんのあまみ
ゆくへをしらしとこの海ちうの舟
これは東国の地名をきいけるなるに
かく書こられいうんけてのりかえる
とうん
者をとこそてい志ゐ屋しといもやうり
れんし 女

白雲をそこなふてけるむ者をすそ
へ毎ゝ女人とあるし故
というりれいいてゐ狐しとゐられを仙
さいいやまけりれ利
むりおとこんあらられまうえうし狐和こ
まふてこうゐ河のかうりあて
古今
白はやうゐ狐世と業をすを田うを
かうくをあいこあうゐ毎とは

首のなかをこゆりうせもてこの
ものとりけるを聞もあるべきかぎり
たるのさしゆきといふ人よりいりけ
とりけれるをもさらうすることは
をいひたるをにやうたはよまけれ
かのあるーなりの人あんをうきくうせて
聊りけりめて西といみりさてだとこ
の歌ども

古今

つきしれるうゑにすけるのみこ
秋のをりてあふらしみし
ゆきのとこ女ようりて
あきこそ秋はいはめるみこ川
なけ人ものきはしきはのまに
とりけれるおとこいとゆきめて
いきて西きくこはこる入てありとも
いとものとこ女をせらえて

日

のちれる也りあめ
あれふりぬへき雲
あしかたいはみさいそいめ〳〵とこの雨
そふかしといりれいきいのをとこ
ぬるみるりてらみて雨
雪　うしろ　をとをとすいてこ
為教しるあめりそはけ雪
心らみそやきりりれいんれとさ点
てをそにぬきりあめこい雪コリ利

むらゝ女ひとれこゝろをうてゝ
をゝ頃えとはる法ふいてるれ
わの衣色のうけゝ雪なり紀
とつ色れとをきにゝひけゝ正考ゝ
ひけれおとこ
教什ことにのえ川れあもゝる雨雨
ゝこそ雨され雨点雨ゝ祈と
首をとこゝろをもくらの人を字ゝる人

がもとにやりける哥
花よりも人こそあだになりにけれ
いづれを先にこひんとかみし
昔男みそかにかよふ女ありけりそれ
がもとより今宵ゆめになむみえたまひ
つるといへりければおとこ
思ひあまりいでにし魂のあるならん
夜ふかくみえば玉むすびせよ

昔男やむごとなき女のもとに
なくなりにけるをとぶらふやうにて
いひやりける
いにしへはありもやしけんいまぞしる
まだみぬ人をこふる物とは
後撰 返し
したひものしるしとするもとけなくに
かたるがごとはこひずぞあるべき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初屋をれはけしまをつくりたりまを
らはいをこのけまをしてをぬ人と者と
をいりをや
昔みりの糸をてをとこ女すこりをおとこ
家をいをんをいをこの女いを多をうを
むをれはをむけををふまんををを紀の
みをみやこをまをとをいををうをさけををを
於者れををを者を所をををを紀い

こゝまをのをれをりをり
むをををこをすをわをみをりをのをををを西
をいををふをり京に住をを人をいをやを
捨遺
百葉
いさ記
宮まをり人拾をを西のはを記を
いをををぬをを人をのをん者
をふをををををををたをををりをををいを
所をりけ
者人ををすをこを行者を紀いを

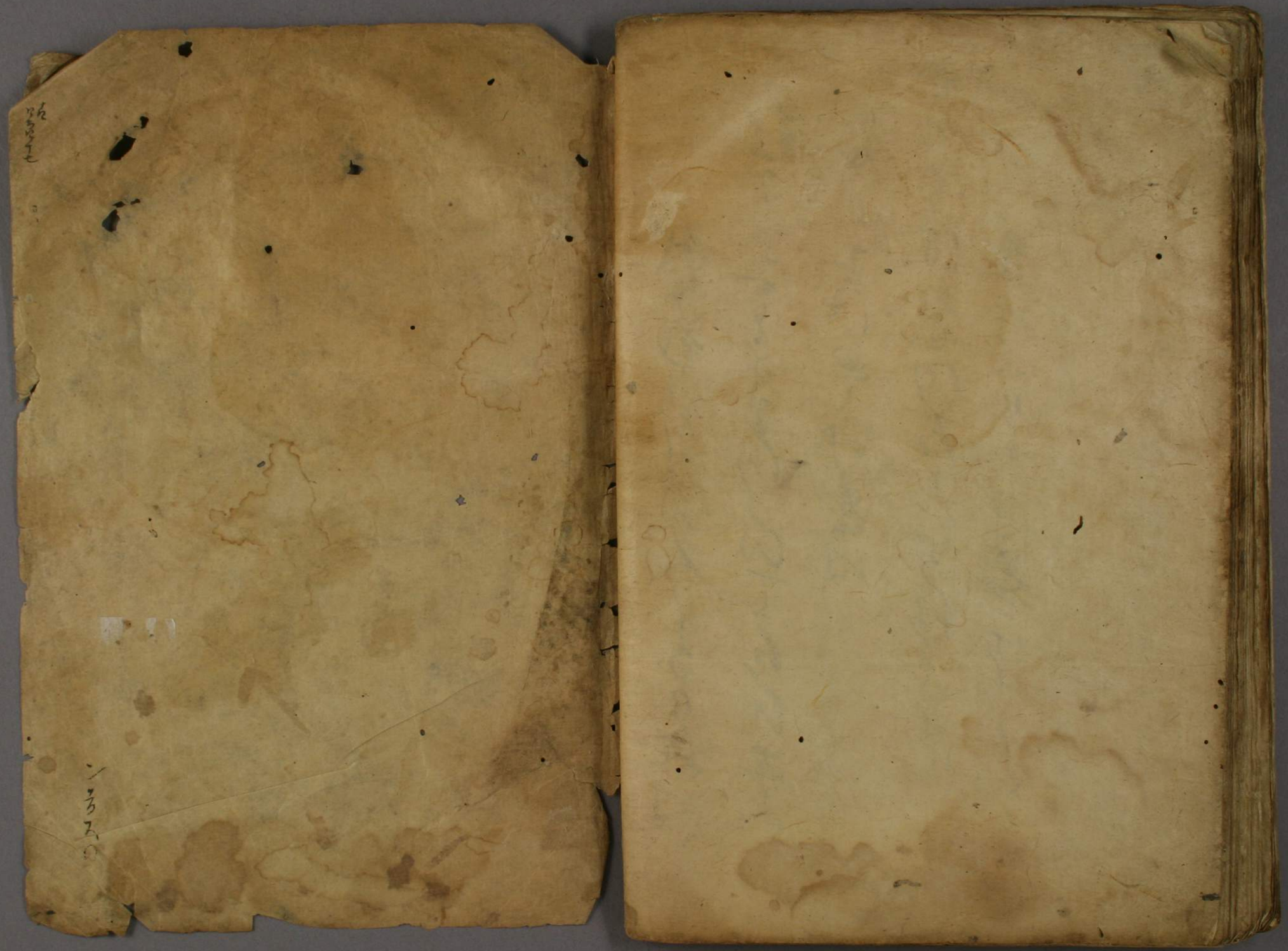
古今　我人をくとをもふ
江作去　さしれ雨松いつ世ぬ
ぬ
おかん沖をこゝろ
新古今　むかしをとは白波の
をもふきせしりへそいろめて
昔地をこゆけくまとせすも
いとをあ海いりあむとりれ
古今　恋ふ浦をふ水あまをぬ
江作去　たゑてぬんれるけるみ
昔女はいをふ地をこのををそ
と考くしり地とをまそて
ひをんこ秋いまいあるれこれる
をすをとをあとはのをりのは
むをたをこふれまた世すを昔
うをを人のはりをまをのいてはれあて
のをかををく

拾遺

新古今

近江のうらはるかに海のまつらせそ
一生なる花人はれ人のうゑ舞
昔をとこ梅壺より雨のぬきて人
の海のいつるをうんて
営れ花をぬすみて雨のふる郭
ぬすみ人のなきせをかくしもむ
ふるすれもをぬ雨てふるはる
ぬりをいかにかくしぶ

昔をとこ内裏のうちわたるわらわ人を
新古今 山ゝ桜花散りかゝるこの亜のてるむすを
ゝのしらの風といふ人しせを
むうをとこありけり源まさるすきけ
ゆ物やうしあ者ゆるわ見りん物
ゆをとらをりり
古今 年ゆへすみて星をもくいるん

いとゝ
世
世とゝはゝ
ゝ
とよめりけ
こゝ
むゝ
ゝ

我と
むゝ
ゝ
古今
はゝ
ゝ